

RI*WAC

Research Institute for Women and Careers

日本女子大学現代女性キャリア研究所

RIWAC 管理番号	RJO0036
調査タイトル	「現代女性の職業キャリアと日本女子大学卒業生のライフコースー2006 年インタビュー調査からー」
論文／雑誌名	「現代女性の職業キャリアと日本女子大学卒業生のライフコースー2006 年インタビュー調査からー」『日本女子大学総合研究所紀要』第 10 号
著者	小林多寿子
掲載ページ	pp.95-104.
発行年	2007.11
出版社	日本女子大学総合研究所

日本女子大学総合研究所

2006 年度総合研究所研究課題 28 「女子大学における生涯学習の意義」プロジェクト

日本女子大学卒業生のライフコースと現代女性の生き方 － 2006 年インタビュー調査報告書－

小林多寿子
村松 幹子

2007 年 9 月

目 次

まえがき	岩 田 正 美
生涯学習総合センター（目白）と西生田生涯学習センター	天 野 晴 子
生涯学習センター受講者意識調査結果の解説	岩 木 秀 夫
現代女性の職業キャリアと日本女子大学卒業生のライフコース —2006年インタビュー調査から—	小 林 多寿子
社会活動における日本女子大学の役割と生涯学習の意義 ～日本女子大学卒業生インタビューから	堀 越 栄 子・川 嶋 庸 子・土 屋 真美子
桜楓会と生涯学習	真 橋 美智子
図書館友の会と生涯学習	岩淵(倉田)宏子
女子大学における生涯学習についての一考察	百 々 佑利子
西日本方面女子大学における生涯学習の現状	高 増 雅 子
梨花女子大学における生涯学習 —イ院長・カク副院長へのインタビューから—	小 林 多寿子

現代女性の職業キャリアと日本女子大学卒業生のライフコース —2006年インタビュー調査から—

小 林 多寿子

2006年8月から9月にかけて、日本女子大学卒業生15名にインタビュー調査を実施した。調査対象となった15名の卒業生たちは、1997年3月から4月にかけておこなったインタビュー調査の対象者であり、彼女たちが38歳あるいは41歳前後の年齢であったときにインタビューをおこなっている。あれから、約10年（正確には9年5ヶ月から6ヶ月）たち、48歳から51歳前後の年齢になったいま、彼女たちはいかに生きているのだろうか。どのような40代を送り、これから迎える50代をどのように展望しているのか。さらにその先のエイジング・プロセスをいかに念頭に置いているのだろうか。現代女性の生涯を視野に入れた職業キャリアを考える視点に立って、40代に照準し、中年期を生きる本学卒業生のライフコースに注目したい。

この調査は、日本女子大学卒業生のライフコースと現代女性の生き方を縦断的にとらえるために、10年の時間をおいてインタビューを実施し、同一個人を継続的に追跡し時系列的な変化を把握することをめざしているパネル調査の一環である。本稿は、1997年調査をふまえたうえで、2006年インタビュー調査結果を簡明に紹介し、そこに見出される問題点を指摘しながら、現代女性の職業キャリアと日本女子大学卒業生のライフコースを考えていく端緒としたい。

【インタビュー対象者のライフコースとキャリア形成】

本調査の背景には、女性のライフコースとキャリア形成について、「女性のキャリア形成は、職業キャリアと家族キャリアの交差により多様なライフコース（展望）パターンが生じる」[村松1998:15]という考えがある。具体的には、家族キャリアにおけるライフイベントとしての結婚と出産、職業キャリアに関するイベントである大学卒業後、就職、結婚退職、出産退職、育児後参入を組み合わせる女性の生き方を考えることを基本とし、現在どの段階に位置しているかをあきらかにしようとしていた。

17名のインタビュー対象者は ライフコースパターンにおいてつぎのような特徴をもっていることが調査票調査からあきらかになっていた。1997年の回答時点で、17名全員がなんらかの職業についており、17名のうち、勤続型10名と再参入型7名であった。さらに家族キャリアと職業キャリアとの関係にもとづいてライフコースパターンをみると、勤続型10名のうち、Aタイプ〔結婚しない、職業を持ち続ける〕が1人、Bタイプ〔結婚し、出産しない、職業を持ち続ける〕2人、Cタイプ〔結婚し、出産する、職業を持ち続ける〕7人、再参入型7名のうち、Dタイプ〔結婚し、出産する、結婚で職業を離れ、育児後、再び職業に就く〕3人、Eタイプ〔結婚し、出産する、出産で職業を離れ、育児後再び職業に就く〕4人であった。

家族キャリアの点では、1997年時点には既婚者13名で、うち、子どもを持つ人は9名、子どもの数は4人が1名、3人が3名、2人が5名であった。居住形態では、親世代と暮らす3世代家族が4名、核家族6名、夫婦と親世代1名、夫婦世帯2名、単身居住4名であった。

職業キャリアのうえでは、つぎのような特徴があった。大学卒業後、17名全員が就職したが、そ

の就業形態は、フルタイム16名、パートタイム1名、職種は専門8名、事務7名、販売2名であった。17名中13名は初職を退職した経験を持ち、結婚や出産という家族キャリア上のライフイベントで退職したものが7名あった。1997年調査時点で、17名はみな仕事をもっていて、その就業形態はフルタイム8名、パートタイム5名、自営・フリーランス4名、職種は専門11名、事務4名、販売2名であった。またこれからの職業キャリアについては、「いまの仕事を続けたい」11名、「他の仕事に移りたい」3名、「いまの仕事を辞めるわけにはいかない」3名という回答をしている。

【2006年インタビュー調査】

1997年インタビュー調査は、1997年3月から4月にかけて筆者が村松幹子とともにこない、その結果は、『大学卒業後の生活・意識と大学評価に関する調査報告書—日本女子大学卒業生の調査から—』（1998）において、村松が「第3章面接調査対象者における卒業後の生活と意識」、筆者が「第4章卒業生たちのライフストーリー」としてまとめた。この調査報告書は、17名のインタビュー対象者全員に送付されている。

17名は、当時30代終わりから40代に入ったところで、既婚で4人の子どものもち、一番上の子どもが高校2年生になった人、2人の子どものを保育園に通わせ、育児勤務制度で短縮勤務中の人、インタビュー時点で妊娠中の人、離婚した人、これから結婚する人、未婚の人等、とりわけ家族キャリアの多様性が目立った。あれから10年たち、17名は40代終わりから50代にさしかかっている。この10年のあいだに、日本社会にはさまざまな変動があり、経済動向があったが、そのような社会の変化を受けて職業キャリアはどのように変わったのか変わらなかったのか、さらに子どもたちの成長や親の高齢化、本人のエイジング・プロセスを受けて家族キャリアはいかに変わったのか、家族キャリアの変化は職業キャリアにいかに関与をおよぼしたのか。10年の変化を問うことを中心にしてインタビュー調査をおこなった。

2006年8月中旬、1997年インタビュー調査対象者17名に再インタビューの依頼連絡を村松がとった。そこで自宅が変わった人が4名、勤務先あるいは仕事が変わった人が9名あることが判明した。自宅も勤務先も変わり、連絡が取れなかった人1名、仕事が変わり多忙のためにインタビュー実施予定期間中に時間をとれない人が1名あり、結局、17名中、15名にインタビューをおこなうことができた。

インタビューは、2006年8月19日から9月2日にかけて実施した。インタビューの場所は、対象者の自宅、喫茶店やティーラウンジ、勤務先、目白キャンパス等、対象者の都合に合わせて設定し、前回同様、筆者と村松が聞き手となってそれぞれ2時間前後のインタビューをおこなった。

自宅も仕事も変わらず、安定した10年を過ごした人もあれば、自身の離婚や再婚、子どもが結婚や就職、進学で巣立ち、家族キャリアに変化のあった人、あるいは手術を必要とする大きな病気をした人、親世代の介護や死別を経験したり、身体上精神上大きな負荷のかかる変化のあった人、また仕事のうへで昇進したり、役職についたり、転職したり、海外赴任したり等、職業キャリアで変化のあった人、このように15人の10年はそれぞれ大小さまざまな変化があったことがわかった。そこで、15名のライフコースパターンに着目した変化を念頭において、職業キャリアにかかわることを〈仕事〉、家族キャリアにかかわることを〈家庭〉として、インタビューで語られたことを簡潔にまとめて示し、対象者の語りを引用しつつ10年の変化を考える手がかりとしたい。（なお、各対象者の冒頭の番号は、1997年の報告書と同じものを使用した。）

1997年		2006年	〈キャリアタイプ〉
1	都立高校教師 [被服学科]	→	同職 〈勤続型・キャリア継続〉
2	百貨店勤務 [社会福祉学科]	→	同職 〈勤続型・キャリア継続〉
3	化学メーカー勤務 [家政経済学科]	→	同職 〈勤続型・キャリア継続〉
4	情報サービス会社勤務 [教育学科]	→	(インタビュー実施せず)
5	建築設計事務所自営 [社会福祉学科]	→	編集出版 〈フルタイム再参入型〉
6	生命保険会社勤務 [英文学科]	→	無職 〈フルタイム再参入型のち無職型〉
7	住宅メーカー勤務 [住居学科]	→	同職 〈勤続型・キャリア継続〉
8	社会福祉法人勤務 [社会福祉学科]	→	日本語教育 (海外派遣) 〈フルタイム転職型〉
9	酒類販売自営業 [国文学科]	→	大学職員 〈フルタイム転職型〉
10	研究所パートタイム [国文学科]	→	(インタビュー実施せず)
11	塾経営 [被服学科]	→	同職 〈勤続型・キャリア継続〉
12	流通関係パートタイム [英文学科]	→	教育関連パートタイム 〈パートタイム転職型〉
13	ペーパーアーティスト [住居学科]	→	同職 〈勤続型・キャリア継続〉
14	福祉関係パートタイム [社会福祉学科]	→	保育園管理職 〈フルタイム再参入型〉
15	教育関連パートタイム [児童学科]	→	同職 〈パートタイム勤続型・キャリア継続〉
16	フリー編集者 [教育学科]	→	同職 〈勤続型・キャリア継続〉
17	保育園パートタイム [児童学科]	→	事務系会社勤務 〈フルタイム再参入型〉

【15名の卒業生インタビュー】

1 都立高校教師

〈仕事〉

この10年のあいだ、都立高校で転勤したが、新たな勤務先の高校が中高一貫校へ転換されることになり、新設校の立ち上げに関わるようになった。その間、都立高校の管理強化や中学校教育にも関わらざるをえなくなり、とくにこの数年、仕事のうえでストレスを強く感じている。教員の年齢構成のなかでしだいに上のほうになり、今後、管理職につく可能性がでているが、自らの適正を考えさせられている。

〈家庭〉

子どもは男の子二人であるが、上は高校を卒業し、下は高校2年となった。兄弟は異質なタイプで、異なる進路を進もうとしている。この数年のあいだに、実父の死、実母の病氣、母方の祖母の介護、さらに実家の土地問題が浮上し、対応にあたるなかで実家とのつながりが増した一方で、二世帯住宅で同居する義父の死や夫との齟齬など家族の構成の変化や子どもたちの成長に連れて、これまでとは異なる状況が生じ始めている。

2 百貨店勤務

〈仕事〉

10年前は、二人めの子どもの育児休暇のあと、午後3時半帰宅という短縮勤務のできる育児勤務制度を利用した最後の年だった。翌年からフル勤務となり、その2年後に課長試験に受かって、幾つかの部署を経て入社26年めとなる。いま、部長試験のハードルを前に管理職をめざしていくこ

とへのためらいを感じている。会社の人事制度のなかで男性社員と競争していくようなサラリーマン社会のピラミッドを登り詰めていくしかないのかということに寂しさを感じている。仕事をして自分の存在を周りから認められることや、専門性があれば認められ、違う満足が得られるのではないかとおもう一方で、部長職になって仕事に長時間を費やす状態になることも決意できない。仕事と子育てを両立させることが初志だったことを言い聞かせたり、仕事は続けていくが、どう終わるかを考え始めたりしている。

〈家庭〉

子どもは男の子二人で、高校生と中学生となり、子どもが難しい時期にさしかかってきた。親のことを素直に聞くような年齢ではなくなり、悩まされることが増えてきた。地方公務員の夫は残業もなく、定時に帰宅できるので、夕食や子どもの世話を夫に託してきたが、しばらくは家庭に時間をかけたいと考えている。

3 化学メーカー勤務

〈仕事〉

入社後、11年間役員秘書の仕事をしたあと、34歳で食品事業部へ移動し、マーケティングへと職場が移った。そこで大ヒット商品の開発に関わり、会社の主力商品となっていくドラマティックな現場にいた。入社したときは小さな会社だったが、大きく成長してグローバルな会社になっていくのを目の当たりにしてきた。全国へ出張したこともあったが、いまは調査部門で仕事をしており、一日パソコンにむかっていてほとんど社にいる。いまの部署では分析力や数値で報告書を出すことが仕事である。

〈家庭〉

未婚で、34歳で一人暮らしを始めて以来、生活は変わっていない。スポーツジムに通い、食べ歩きのにに関わり、毎週土曜日は近居の両親宅で夕食をとってコミュニケーションをとっている。父は80歳を過ぎているが、華道師匠として活躍しており、健康にも恵まれ、充実した日々を送っている。

5 建築設計事務所自営 → 編集出版（フルタイム）

〈仕事〉

夫の建築設計事務所を自宅に移したことにともない、夫の事務所を手伝う仕事は辞めて、マーケットリサーチ会社で5年間、週3回働いた。2年前に大学時代から学んでいる先生に誘われて、昔話を編集・出版する仕事にフルタイムで就いた。季刊誌編集、単行本出版のほかに、研究活動や経理のマネジメントもしている。夫の仕事ではいまも経理は手伝っている。

〈家庭〉

3人の子どもは大学1年、高校生、中学生となり、手を離れた。85歳になった父はパーキンソン病を患っているが、日常のことはまだ自分の足ででき、母も病気がちであるがヘルパーの介助を受けながらもなんとかやっている。自分自身は体重を減らすために歩くことを心がけている。

6 生命保険会社勤務 → 無職

〈仕事〉

前回のインタビュー時には保険会社で働いていたが、契約を取るのに苦しみながらも3年間勤め、

総合職になった。しかしガンが見つかり、手術をした。ガンの状態はよかったが、抗ガン剤で喘息になり、結局、会社を退職した。1年半後に損害保険会社に就職したが、ストレスで喘息が再発し、退職する。家に引きこもりがちになったが、立ち直り、保険会社やリフォーム会社で一年、パートで働いた。そしていまは無職である。

〈家庭〉

この10年間、ガンのほかにもさまざまな病気を重ねてきた。夫ともうまくいかない時期があったが、夫が病気になったり、交通事故に遭ったりして、たがいに理解できるようになり、最近はどうもいっている。長男は大学を卒業して就職し、東京を離れた。長女も大学生になり、子育ては終わったと思う。体調改善のためにウォーキングを始めてから、体重が減り、体の調子もよくなった。48歳で子育てを終わってヒマなので、社会的つながりがほしいと思っている。

7 住宅メーカー勤務

〈仕事〉

5年前に課長職になり、高齢者と住まいという専門を固めてきた。大学の教員と共同研究したり、非常勤講師を続けたり、会社の内だけでなく、外へも仕事を広げてきた。平生の働き方では、毎日午後9時頃まで会社で仕事をし、平均すると、週に2度くらいスポーツジムに通い、2日くらい友だちと食事をしたり外の人に会ったりする生活で、土日は出掛けないというリズムで過ごしている。

〈家庭〉

32歳で離婚し、シングルであったが、3年前に同業の人と再婚した。夫は海外の企業に転職したので、日本とのあいだを往復する生活をしている。結婚して、一人ではないという安心感、パートナーがいるというのは心強いものをもたらしてくれた。離れていても同業なのでわかりあえ、自分のネットワークに夫のネットワークが加わり、世界が広がったと思う。

8 社会福祉法人勤務 → 日本語教育専門家（海外派遣）

〈仕事〉

前回のインタビュー時に働いていた社会福祉法人の仕事は4年勤めて、日本語教育の仕事へ戻りたかったので辞めた。JICAのシニアボランティアとして南米派遣となり、日系の子どもたちに日本語を教える仕事についた。2年間の予定であったが、病気のため早期帰国した。その後、日本語学校で働きながら、大学院修士課程で学び修士号をとった。国際交流基金の日本語教育専門家としてヨーロッパへ派遣になり、現在、ヨーロッパに在住して日本語講座の運営の仕事をしている。

〈家庭〉

独身生活で、一人遊びが好きで、一人で旅行したり食事したりすることを楽しんでいる。趣味はチェロを弾くことと本を読むことで、日本でもヨーロッパでも市民オーケストラに参加して、チェロを楽しんでいる。

9 酒類販売自営 → 大学職員

〈仕事〉

自営業の仕事をしていたが、6年前、不景気と小売業の環境変化で売り上げが落ち、私が外へ働きに行くことになった。桜楓会の人材銀行で、他大学の臨時職員の仕事を心得、週5日勤務している。

〈家庭〉

義父が要介護になり、自営業の仕事ができなくなった。できるだけ自立を促し、寝たきりにしないよう努めている。自分の両親のうち、父が亡くなり、その後、母が軽い脳梗塞になり、近所のマンションに引っ越してきた。子ども二人は上が大学生、下が高校生になり、順調に成長している。

11 塾経営

〈仕事〉

塾を続けてきた。10年前は受講生徒が40人くらいいたが、いまは中学生5，6人になり、減ってきた。子どもが変わり、小学生の家庭が急速に変化していることを感じている。夫は住宅設計の仕事をしていたが、辞めて、木造の寺の絵を描きはじめた。木造の寺の絵は予想以上に評判で4回の展覧会をし、NHKのラジオでも紹介された。絵を描くことを勧める本も出版している。

〈家庭〉

この10年のあいだ、両親が相次いで亡くなった。9年前に父が脳梗塞で倒れ、3年後に亡くなり、母はガンで亡くなった。実家は手つかずのままなので、これからどうするか考えないといけないとおもっている。夫も病気で入院したが、健康を取り戻し、絵を描くことを続けている。

12 流通関係パートタイム → 教育関連パートタイム

〈仕事〉

前回のインタビュー時点で就いていた流通関係パートタイムの仕事は、山陰に住む親が病気になって辞めた。その後、無職を経て、子どもが高校生になって帰宅が遅くなり、一人で長時間うちにいることで刺激がなくなったので、週に3日、大手の塾でパートタイム勤務を始めている。

〈家庭〉

息子は大学を卒業して就職した。しかし大学院へ行きたいと言い出し、夫と悩んだことがある。娘の大学進学後は、エンブティ・ネストを感じて落ち込んだが、コーラスグループの活動で忙しくなり、立ち直った。

13 ペーパーアーティスト

〈仕事〉

前回のインタビューの後、子どもの誕生と世の中の不景気により仕事量は減ったが、展覧会の開催は続け、変わらずに仕事をしてきた。これからの10年は自分の制作のために時間を使いたいと考えている。

〈家庭〉

10年前のインタビューのときは妊娠中だったが、出産後、離婚し、転居した。ちょうどバブルがはじけてビジネスがスローになったこともあったが、保育園には預けなくて、2，3ヶ月めからベビーシッターをつけて仕事をしてきた。ベビーシッター代がかかったが、家でひまなときは共に過ごし、幼稚園には3年間行かせ、保護者会の活動もし、いま小学校3年生になっている。

14 福祉関係パートタイム → 保育園管理職

〈仕事〉

3年前から老人保健施設でディサービスの仕事を始めたが、隣接の保育園の副園長の仕事もち

かけられて、1年半前から副園長になった。フルタイムの仕事になり、毎日午前8時半から午後5時半で働いている。副園長は統括の仕事のほか、保育主任の仕事もし、足りないときは保育にも入る。高齢者と子どもを繋げられるかなとおもひ引き受けたが、なかなかおもうようにはいかない。3年間はがんばろうとおもったが、いま揺らいでいる。しかし収入のともなう仕事は続けていきたいと考えている。

〈家庭〉

同居している両親は高齢ながらもまだ元気である。3人の子どもたちは大きくなって、長女は大学を卒業して働き始め、息子は大学受験を終えたところである。夫は児童館で学童クラブを統括する仕事をしているので、私の仕事を理解してくれており、家事も分担している。

15 教育関連パートタイム

〈仕事〉

10年前は新しく始まる通信添削の立ち上げから働きはじめ、一時期は扶養控除を超えるくらい仕事が増えたこともあった。近年は他社の通信添削が伸びてきて競争激化で会員数が減っており、扶養控除の範囲で添削と添削者を指導する仕事を続けている。

〈家庭〉

この10年のあいだに父母が亡くなったり、2年間、夫が単身赴任したりということがあった。長女と次女は大学生、長男は高校2年生で、この10年は子どもの成長に追われたが、手がかからなくなり、自分の時間を持ち始めている。バイオリンのレッスンを受け始めたり、日本女子大学の生涯学習センターで講座をとったりしている。大学時代の同級生8人と廻していた交換ノートはこの4、5年途絶えていたが、今年のマンドリン・コンサートには6人が来てくれた。友人にもそれぞれの10年があった。

16 フリー編集者

〈仕事〉

10年前と仕事の内容は変わっていない。企業の広報誌、社内誌、情報誌の編集をしている。大手広告代理店から仕事を受け、フリーランスのライターやデザイナーと組んでディレクションの仕事をしている。3年前にいやになっていったん編集の仕事を辞め、ライターの仕事だけをしていたが、今年になって復帰し、いまはまた24時間年中無休で、土日関係なくやっており、締め切りのある仕事の日々である。

〈家庭〉

夫と夫婦二人のほか、実母を扶養家族として養っている生活には変わらない。仕事を休んだとき、陶芸ともうひとつ、自己実現のための趣味をはじめようとしたが、できなかった。夫も経営コンサルタントの仕事が忙しく、平日は顔合わせないこともあるが、休日は一緒に散歩したりしている。

17 保育園パートタイム → 事務系会社フルタイム

〈仕事〉

保育園のパートタイムは前回のインタビューの翌年に辞めて、4年ほど司法書士事務所で働いたが、司法書士が高齢のため事務所を閉鎖することになった。そのころ、変形股関節症が悪化して歩行困難になり、身障者手帳をとり、いまの仕事についた。事務処理の仕事であるが、勉強してエク

セルを駆使できるようになった。いまは10時から18時のシフトで働いているが、これから管理職になるかどうか問われると予想している。

〈家庭〉

長男は大学を卒業して結婚し、家を離れた。次男は大学院生、三男は大学生、一番下の女の子は高校2年生になった。8ヶ月前に肺ガンがわかり、手術をした。再発・転移はないといわれているが、生きているうちに好きなことをやっておかないとねと思うようになった。夫との関係がうまくいってなく離婚も考えたが、ガンになって考え直した。夫は子煩悩だったので、子どもが成長して手を離れていくことが寂しいのかもしれない。

【卒業生たちの10年と40代のキャリア】

2006年インタビュー調査は、40代を生きる現代キャリア女性の10年間についてあらためて考えさせられるものとなった。とくに職業キャリアを持続してきた女性たちにとってライフコースのなかで40代とはどのような特徴をもつのかという観点からの考察が不可欠であることがみえてきた。

本調査は、当初より職業をもつ卒業生を調査対象に設定しており、職業キャリアを軸にキャリアタイプを考えることでその特徴があきらかになる。彼女たちの10年は、キャリア継続か転職かで二つのタイプに分かれる。2006年インタビュー時点で、15名のうち、病気のために無職になった一人をのぞき、14名が仕事に就いている。14名のうち、8名は、フルタイムであれパートタイムであれ、10年前と同じ職業を継続している勤続型であり、6名は仕事を変えた転職型である。転職型は、パートタイムからフルタイムへ再参入3名、フルタイムでの転職2名、パートタイム転職1名で、いずれもこの10年間の再参入・転職型である。

40代という年齢層との関連で現代女性の職業キャリアの特徴は、家族キャリアの現況とクロスさせてながらとらえる必要がある。キャリア継続タイプとしての勤続型ではその持続性に、あらたにフルタイムの仕事に就いた再参入型ではその仕事観にとくに注目したい。

◆勤続型

卒業後、20年以上にわたって同じ会社あるいは同じ職種で働き続け、職業キャリアを維持・発展してきた人たちにとって、なぜ持続できたのか、その持続性を支えた要因が重視される。しかし他方で、彼女たちの語りからは、40代という年齢によるライフステージと家族キャリアとに関わる問題に直面しているさまが浮びあがっていることも見逃せない。勤続型がかならずしも安定した10年間を送ってきたわけではない。たとえば《2百貨店勤務》がつぎのように語っているところに一つの特徴的な問題点が浮上している。

「10年前のほうが仕事も子育ても充実していたようにおもいます。とくに企業社会で勤続年数が長くなると、管理職の段階を進んでいくことが課題となりますが、管理職任用への試験を受けるかどうかの選択を迫られています。管理職になることは企業のなかで達成感を得られるにちがいないのですが、引き替えに仕事に費やす時間が大幅に増えることとなります。子どもが思春期になり、仕事の比重が高まることを選ぶことには迷いがあり、仕事か家庭かという葛藤に直面するようになりました。」《百貨店勤務》

変化の著しい現代社会において着実に職業キャリアを形成し持続する力は、仕事上、押し寄せる様々な変化だけでなく、親世代の死去や病気等による脆弱化や子どもの成長にともなう新たな問題

という家族をめぐる状況変化にも十全に対応できてこそ得られるものである。とくに企業のなかで職業キャリアを形成してきた高学歴女性としての卒業生たちは、40代になり、管理職につく年齢層になってきているが、家族キャリアとの関係で自らの働き方に再考を迫られたり、組織管理能力を求められたり、これまでに養ってきたキャリアとは異なる能力の発揮が要請されている。

◆再参入・転職型

一方で、再参入・転職型の既婚者たちは、いずれも子どもたちが高校生以上になり、成長して手を離れていく時期を迎えており、さらに親世代も脆弱化しながらも彼女たちへの依存度が低いことが職業への再参入を促進したことがわかる。具体的には、《14福祉関連パートタイム→保育園管理職》がつぎのように語っていることからみえてくるように、子どもの成長と親世代の自立維持が再参入へのもっとも大きな促進要因である。

「両親と二世帯居住ですが、まだ元気で介護が必要な状況ではありません。子どもが小さいときからなにかと助けてもらいました。だから私が外に出ていくことができました。

いまは、子どもたちも大きくなって、学校や塾で忙しく、私が仕事から帰ってもまだだれも帰っていないということもあり、夜9時になってようやく夕食ということもあります。フルタイムになって下の子のことが気になりますが、夫は夕方6時には帰宅できるので、夕食は夫が作ることで多くなりました。今年の夏休みもみんな休みがバラバラで、いっしょに過ごすことは少なくなりました。」《保育園管理職》

家族キャリアとの関連では、日常生活において配偶者の家事分担も再参入後の職業継続にとって重要な要因であろう。あるいは《9酒類販売自営業→大学職員》が「私が働きに出たことは、私がいなくて家族が自立するのを促したことがよかったとおもいます」と語るように、再参入がむしろ家族の家事分担と親世代の自立をうながしたという例もある。

再参入型のなかでとくに注目したいのは彼女たちの仕事観である。たとえば《17保育園パートタイム→事務系会社勤務》にとって、4人の子どもの成長がフルタイムの仕事に就くことを促したことはたしかである。しかし、この10年間に障害をもったこととガンの手術をするという身体上の厳しいハンディを経験しており、それでも再参入を果たし、職業キャリアを継続できているのは、働くことで成長したいという彼女の仕事観に支えられていると考えられる。

「家事はもうそれほどでもなくなりました。働きたかったです。働かないと成長できない、人間は成長しない。働いていない人には人間的魅力を感じないです。

人間として成長できる人生を送りたいなとおもいます。人生を切り開いていける時代になっているとおもいます。教育も医療も自分で選べる時代になってきたとおもいます。わたしもガンの手術のときにはセカンドオピニオンをもらいに行きました。意見を言えるように育てられてきたことはよかったとおもいます。女子大でよかったのかもしれませんが。共学だったらどうでしょう。女性が生き生きできるように育てられたようにおもいます。」《事務系会社勤務》

「働いて成長したい、人間として成長できる人生を送りたい」という語りには、働くことを人間的成長と結びつけて意義づける仕事観があらわれており、個人的な身体上のハンディを障壁としない職業キャリアの持続を支えている。このような仕事観の生成も職業キャリアの形成と持続に欠かれない側面であり、今後、現代女性の職業キャリアをとらえるうえでも考慮される点である。

本稿では、2006年インタビュー調査の結果をもとに、40代という年齢層との関連で現代女性の職

業キャリアの特徴を考えていくための手がかりを検討した。卒業生たちのライフコースは、現代女性のキャリアをあらためて検討する多くの課題を提起してくれており、さらに考察を重ねていきたい。

〈註〉

2006年8月19日から9月2日にかけて実施したインタビューでは対象者の許可を得て録音テープを廻していたが、本報告において引用した語りは筆者のメモにもとづいており、録音されたもののトランスクリプトによるものではない。

ご多忙のなかインタビュー調査にご協力いただいた卒業生の方々に深謝いたします。なお本稿は2006年インタビュー調査報告書の一部である。

1997年インタビュー調査は、1996年11月におこなった日本女子大学総合研究所「女子大学の将来展望に関する総合的調査研究」プロジェクトによる「卒業生の大学評価」の調査票調査の回答にもとづいて実施している。

〈関連文献〉

小林多寿子・村松幹子1998『大学卒業後の生活・意識と大学評価に関する調査報告書（1）—日本女子大学卒業生の調査から—』日本女子大学総合研究所「女子大学の将来展望に関する総合的調査研究」プロジェクト1

牧野暢男（著者代表）1999『大学卒業20年後の女性の生活・生活意識・大学評価に関する調査報告書—女子大学出身・共学大学出身別分析結果—』日本女子大学総合研究所プロジェクト「女子大学の将来展望に関する総合的調査研究」

【編集後記】

『日本女子大学総合研究所紀要』第10号をお届け致します。本号は、2006年度に研究期間を終了した研究課題の研究成果を掲載しております。今号該当は、研究課題（27）「学際的共同研究による生活安全保障科学の創成」、研究課題（28）「女子大学における生涯学習の意義」、研究課題（30）「教育現場における精神的な困難を抱えた子どもたちと家族への支援のあり方に関する総合的研究」の3課題で、充実した号となりました。各プロジェクトにご参画くださいました研究員・客員研究員のご研鑽ならびに関係各位のご尽力に感謝いたします。

当研究所が公募する研究課題の研究範囲は、下記の通りです。

- （1）創立者成瀬仁蔵に関する研究
- （2）日本女子大学一貫教育に関する研究
- （3）日本女子大学を拠点とする学際的な共同研究・調査

（1）（2）は、本学固有の課題を、（3）は一般性・普遍性のある課題を対象としますが、本年度の研究課題はすべて（3）に該当することになります。本学固有の課題の重要性は言うまでもありませんが、広い視野に立つ研究の拠点となりうる課題の活性化もまことに喜ばしい限りです。

学内外の皆様のご意見・ご叱正をいただければ幸甚です。また、ご支援・ご鞭撻も賜りますよう、お願い申し上げます。

（今号編集担当 倉田宏子・橋本のぞみ・鄭銀志）

日本女子大学総合研究所紀要 第10号

2007(平成19)年11月1日 発行

発行人 倉田宏子

発行所 日本女子大学総合研究所

〒112-8681 東京都文京区目白台2丁目8番1号

電話 03(3943) 3131(代表)

03(5981) 3277(直通・FAX)

印刷所 メディア・パックス

〒178-0061 東京都練馬区大泉学園町6丁目13番20号

電話 03(5947) 9135